

「豊太郎が意識のないときに相沢がエリスに伝えた」と
いうストーリーについて

① はじめに

私はこの「舞姫」を読んだ時、なんとなく違和感を感じた。この「舞姫」の中で豊太郎は自我に目覚め、それゆえに深く苦悩する。しかし、最後の場面では豊太郎の知らないところで決断が下されてしまった。これではあまりにも結末があっけなさすぎる。鴎外がこのようなストーリーにしたのには何か理由がある。それを知りたいと思い、このテーマにした。

結論から言うと、鴎外は「自我に従い生きることが大切であり、それができないと後悔する。しかし、今までの日本社会ではそれをすることが難しいので、日本はこのままではいけない。」ということ伝えてきたのだと思う。

② 本論

豊太郎は以前、他人の言うことに従い世間で評価される立身出世ばかり目指していたが、ドイツの大学の自由な雰囲気に触れ、エリスと出会い、自我（恋）に重きをおくようになる。その後、地位も名誉もすべて捨てて自我（恋）をとれるかの決断で思い悩んだ。相沢はドイツに来る前の豊太郎と同じような考えを持った、立身出世を重んじる今までの日本社会を象徴する人物である。

このストーリーでは豊太郎がこのような状態にあるときに、その相沢がエリスに伝え、その結果豊太郎は帰国を選ばざるを得なくなった。これは明らかに相沢の決断である。豊太郎は相沢のせいで自我に従って生きることができなかった。そして帰りの船の中では無二の親友の相沢さえも憎み、エリスとの恋に後悔を残すこととなった。

鴎外自身も東大を卒業しドイツに留学、そしてエリーゼとの恋に落ち、彼女を振り切って帰国するも、一年後、エリーゼは彼を追って日本に来る。しかし、家族によってエリーゼはドイツに追い帰されるといふ豊太郎と非常に似た経歴を持っている。このことから鴎外は豊太郎に自分自身を重ねて描いたのだと考えられる。この時代、今までの封建的な社会を否定し自我を重んじる風潮が起つてきた。豊太郎はまさにその典型といえる。そして鴎外も浪漫主義（自我といろいろな形で向き合うことを重視する）に属していたので、この時代の考えを象徴していたといえる。鴎外は浪漫主義を土台とする自我の目覚めや、自分で決断せず他人に決断された時の後悔、つまり自我に従い自分で決断することが大切だという考えを持っていたと思う。よって自我に従って生きることができない今までの日本社会を相沢を使って表現し、それを批判したかったのだと思う。

③ まとめ

以上のことから鴎外は「自我に従い生きることが大切であり、それをできないと後悔する。しかし、今までの日本社会ではそれをすることが難しいので日本はこのままではいけない。」ということはこのストーリー構成を通して伝えたかったのだと思う。

ただ、どうしてここまで自分と豊太郎を重ねて描いたのに相沢によってエリスと別れる場面で、家族によってエリスと別れるとしなかったのかははっきり分からない。根拠はないが、舞姫を書いた後の鴎外自身の生活を考え、家族は登場させられなかったからだと思う。

このレポートを書くにあたって、本文、森鴎外のホームページ、そしてこれと同じような取り組みをしている友達の意見を参考にさせてもらった。